

インタビュー / 中村 修二 教授： サイエンスが好きな米国、嫌いな日本

インタビュアー： 餌取 章男（産総研 広報アドバイザー）

なぜ科学が嫌いになるのか

餌取 ミレニアム技術賞の受賞、おめでとうございます。

中村 外国では日本よりはるかに大きな反響を呼んでいます。

餌取 フィンランドの賞で先生が二人目。第1回の受賞者はWWWの創始者でした。ノーベル賞に匹敵ないしはそれ以上の賞ではないかと思えます。こういう賞こそ、日本がつくるべきなのです。日本国際賞、京都賞、国際生物学賞、本田賞、ブループラネット賞、コスモス国際賞など、賞金額が1000万円以上の賞が日本には結構あるのですが……。

中村 でも、国際的に知られていない。

餌取 日本国内でさえ有名にならない。ノーベル賞を受賞するとマスコミは大騒ぎします。ところが日本国際賞は小さな囲み記事でしかない。

中村 なぜでしょうね。今度の賞はまだ取材が続いています。インタビューで「なぜ日本ではそんなに扱いが小さ

いのか」と逆に聞かれました。基本的に、外国の人はサイエンスが好きで、日本人はサイエンスが嫌いなのかもしれませんね。

餌取 でも、日本の小学生は理科や科学が好きなんです。

中村 そうです、日米とも小学生は理科が好き。ところが中学、高校に進むにつれて差が出てくる。アメリカ人は小学生の好奇心を持ったまま大人になれるのに、日本人は大学受験で理科が嫌いになってしまう。アメリカの大学入試は内申書が7割か8割で、残りの2～3割が簡単な資格試験です。サイエンスの好きな子が一生懸命やれば、内申書の点が高くなる。だからそのまま大人になれるんです。そういう社会だから、サイエンス関係の賞と言えば、一般のアメリカ人も非常に喜んでくれる。

2001年にアラスカの研究会で、料理を出してくれる現地の若い男性が「ドクター中村でしょう」と話しかけてきたんです。「なんで知っているの」「『ポピュラーサイエンス』を読みましたから」と。アルバイトの人が科学雑誌を読んでいる。

「ロボット大量養成教育」と私は言っているのですが、日本では5教科なら5教科、全員が同じことをさせられる。サイエンスに限らず、これでは美術や音楽が好きな子は育たない。

餌取 受験で出る問題も、科学の本質とあまり関係ないですね。

中村 むりやり化学記号を覚えさせられたら、誰でも化学が嫌いになりますよ。サイエンスは覚えることではないのです。

大学教授は経営者

餌取 アメリカの大学の教授は中小企業の経営者と同じだ、と書かれています。

中村 週に1回講義する代わりに給料を出す、あとは勝手に何でもせいというのがアメリカの大学です。研究がしたかったら、自分で金を集めてきて、学生を雇って研究しなさい、です。スペースも、金を持ってこないといけません。

今、学生を10人くらい雇っていて、保険代なども全部含めて1人600～700万くらいかかる。10人で6000～7000万円。あとは実験の維持費などで、全部で1億円ちょっと。これが毎年です。それが集められなくなったら倒産。アメリカには定年制はなく、お金を集められる限り、永遠に仕事を続けることができるんです。

餌取 出してくれる相手は企業ですか。

中村 政府と企業、両方です。



餌取 企業の場合、何か制約を受けることはないのですか。

中村 いろいろな契約がありますが、私がやっているところは特許実施権を独占的に与えるとか、そういうことで対応しています。カリフォルニア大学では、基本的に特許権は大学が所有します。ただ、実施権を企業に与えて、ライセンス料を必ず大学が取るのです。大学が半分取って、発明者には半分行きます。

広報は日常的なサービス活動

餌取 大学の広報活動はどうか。

中村 よくやっていますよ。1年365日、広報部門は常に動いています。土日は、小中学生が見学に来ます。スケジュールが常に組んであるのです。

とくに夏休みは大変です。サマースクールとか語学研修などで世界中から学生がやって来ます。研究教育スタッフは休みますが、大学そのものは休みなく動いていて、日本の大学とはえらい違いです。

餌取 研究室の見学ツアーもあるでしょう。

中村 ありますよ。「見学させてくれ」とEメールが来たら、誰か学生を出させる。私たち教授が一方的に命令しますが、誰も拒否しません。

餌取 研究者としての意識の違いがあるようですね。

中村 みんな喜んで研究の説明をする。教育の一環だと思っているのです。アメリカでは、小学校から皆の前でプ



レゼンテーションさせる。だから、好きだし得意なのです。

餌取 ミレニアム技術賞の受賞は、大学にとって絶好のPRチャンスですね。

中村 学長が「私は中村君の小間使いだから」と言ってくれて、先日のパーティーも全部仕切ってくれましたし、ワシントンでのフィンランド大使のパーティーにも出席してくれました。

餌取 政府に対しても素晴らしいプレゼンテーションになる。

中村 そう。パーティーの招待客には政府の偉い人と金持ちを呼ぶ。そして暗に「うちにはこんなすごい研究者がいるから、寄付してくださいよ」と主張する。

肝心なことをまず教育しよう

餌取 とくに気になる日米の違いはありますか。

中村 日本では、一番大事なことを教えていないと思います。向こうではまず、どうやって自立して、金儲けするかを教える。金がないと生活できない

でしょう。でも日本では、教育現場に金を持ってくるのは絶対にダメ。つまり一番大事なことを教えていない。

また、理系教育で一番大事なのは特許を書くことですが、これも日本の学校では教えない。特許はお金になるから教えないのです。私自身、特許を初めて知ったのは会社に入ってからでした。ところがアメリカでは、誰でも知っています。そういう一番大事なことを教えないで、日本ではわけのわからないウルトラ受験クイズをやっている。

もう一つ、新しい教授を選ぶとき、この7年ちょっとの間、不採用のケースを一度も見かけません。教授会には20～30人くらいが参加し、もちろん議論はします。でも、投票にかけたら皆が○。もし×を付けたら、必ず皆の前で×の理由を言わなければいけないからです。決定的な理由がない限りは、教授会で落とすことはない。権威者が幅を利かす日本と違うでしょう。だから、日本は「ノー」と言う文化で、向こうは「イエス」という文化だと言っているのです。

餌取 誰かの話と逆ですね。本日はお忙しい中、興味深いお話を誠にありがとうございました。